

在来農具の分布から見た東北地方

河野 通明

KONO Michiaki

(事業推進担当者)

はじめに

神奈川大学の COE プログラムは「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という全体のテーマを掲げて、2003年7月にスタートした。わたしは1981年以来、民具とよばれ全国各地の市町村の博物館や資料館に収集されている在来農具の比較調査をつづけ、馬鍬が全国的にウマグワ系の呼称をもつことなどを手がかりに馬鍬が5世紀に中国江南地方から導入されたこと、紀伊半島の首かせ付き首木から6世紀に朝鮮系渡来人によって無床犁が持ち込まれたこと、山口県の引綱渡し首木から中国系長床犁の伝来、そして九州地方の単橋鞍から中国系長床犁は政府が上から地方に普及を図っていたことなどを明らかにし、それを踏まえて大化改新政府が遣唐使を通して中国系長床犁を入手し、それに改良を加えた政府モデル犁を全国に郡単位で配布して普及を図ったという7世紀の殖産興業政策を復原した⁽¹⁾。このような大正・昭和期の在来農具から古代にさかのぼる遺伝情報を引き出して古代の地方ごとの経済史を復原するというノウハウを生かして、「民具」という「非文字資料」の「体系化」に取り組むことにし、昨年8月から調査活動を開始した。

さて昨年8月から東北地方6県を駆け足ながら141箇所施設を回ったが、それでもまだ東北地方の一部にすぎず、この時点で何か確定的な結論を述べる段階ではない。さらに調査の過程でよく感じられたのだが東北地方は古代に関東地方・中部地方の影響を強く被っているようで、東北地方の解明には関東地方・中部地方の調査が欠かせないことが明らかになってきた。そうであれば個別論文として確実なことを論じられるのはもう少し先のことであり、今回は調査を通して見えてきたことを総花的に報告することにした。

ここで調査報告に先だって、非文字資料としての民具の位置づけについて、簡単に整理しておくことにしたい。

I 非文字資料としての民具

1 非文字資料としての民具研究の有効性

先にも述べたように、これまでわたしは大正・昭和の民具から5世紀や7世紀にさかのぼる歴史、しかも庶民の生産活動と関わる歴史、東アジア諸国との関係を明らかにしてきたが、これは多くの民具研究者の研究とはかなり毛色の違ったものになっている。それを方法面から整理しておこう。

現在民具研究を進めている研究者の多くは民俗学研究者であり、研究方法も使用者、製作者に対す

る丁寧な聞き取り調査をベースにしている。この方法が有効であることはいうまでもなく、とくに高度成長期を境に生活環境が激変して伝統的民具のなかで生きた人々の高齢化や他界の進むなか、裏付けデータをとって資料に厚みをもたせるための聞き取り調査はいま緊急の課題であり、その成果はわたしも利用させてもらってきた。ただこの方法には当然ながら限界も存在する。それは聞き取り調査でさかのぼれるのは話者の祖父母の時代か祖父母から聞いた話を含めても幕末から明治がほぼ限界で、それ以上昔は霧の彼方で見えなくなってしまうことである。

それにもう一つ、聞き取り調査にたよって農具調査をおこなった場合などは、その地の農具の形をその土地の地形や土質と結びつけて説明されることが多い。これは農学系の研究者にも共通して見られる傾向で、小回りのきく抱持立犁は畑地に適応した型だとか、近畿地方の長床犁は水田の「床締め」に適した型であるとかの説明がなされてきたが、北九州では水田でも抱持立犁を使ってきたし、明治中期に北九州の馬耕教師が全国的に抱持立犁に広めた際にも「乾田馬耕」つまり乾田化された水田での利用であった。また近畿地方にも面積の狭い山田はあるが、そこでは古代いらい戦前期まで、ところによっては戦後まで、長床犁が使われてきたのであった。無床犁か長床犁かは地形や土質によるものではなく、その地域に朝鮮系渡来人が来ていたか否かなどといった歴史的事情によるのであって、その犁の形はその地が古代以来たどってきた地域独自の歴史を物語る資料なのである。

これまでの民具研究のなかで歴史にさかのぼる方法として利用されてきたのは紀年銘である。唐箕などには製作年や購入年月日が墨書されていることがあり、これを紀年銘と呼び、1980年前後には紀年銘を手がかりとした民具研究が盛りあがった。また近世になると農業技術書である農書が各地で刊行されるが、こうした農書に紀年銘民具、さらに綿密な聞き取り調査を組み合わせることで地域の歴史を解明するという研究も成果を重ねている。ただこれらの方法でさかのぼれるのは17世紀以降で、その先の中世や古代までは光が届かない。

わたしは文献史学の古代史出身であったこともあって、当初から古代を視野に入れて民具調査をおこなってきた。そのわたしの研究法の特徴といえば聞き取りは前提とせず、紀年銘に出会えることも期待せず、収蔵庫にただモノとして収集されている資料、いわば遺物化した民具を対象としてきたことである。そこでは形や大きさが用途や系譜情報を発信しており、それを短時間で記録すべく写真撮影とフィールドノートに貼り付けた計測表に手順よく計測データを書き込んでいく。そして展示室のプレートやたまたに資料に付属しているラベルに地域呼称が記されていればラッキーとばかりにメモという調査方法である。呼称は地域社会で共有されるコミュニケーションの手段なので通常は個人での改変は起こりえず、ものの実体は新型に変わっても呼称は古いままということがしばしば起こる。したがって呼称はその種の民具が地域社会にデビューした時代の言葉を残していることが多く、ここから伝来時期の限定や地域での受容の様子を復原する手掛かりとなる。

聞き取りや紀年銘による研究は人の言葉や文字から情報を引き出そうとしているのであり、民俗学や文献史学の延長に位置づけられるのに対して、わたしのとっている収蔵庫で遺物化した民具の形の計測比較から情報を引き出す方法は、民具がモノとして発信している情報を読み取ろうとする試みであり、民具の非文字資料としての側面からのアプローチであるといえよう。そしてこれと同様の方法はすでに渋沢敬三のもとで日本常民文化研究所の前身であるアチックミュージアムの同人たちによって1935年にはじめられた足半の研究やそれに続く釜の研究で採用されていたのである。

2 民具資料の「体系化」のための全県調査

ところで「非文字資料の体系化」、わたしの場合は民具資料の体系化であるが、「体系化」という以上は県内くまなく調査する全県調査、それを束ねた全国調査のスタイルをとらねばならない。なぜならどこかの地域にねらいを定めたつまみ食い調査では、調査者に都合のいい見込み捜査になりかねず、客観性が保証されない危険がひそんでいるからである。調査者に不都合な資料も表れるような全県調査をかさねてこそ、民具という非文字資料の特質や文字資料との違い、非文字資料としての民具のもつ可能性が客観性をもって浮かび上がってくるであろう。そしてこの全国調査もまた渋沢のもとでの足半の研究や筌の研究で採用されていた方法である。そこで5年間でそれが可能かどうかはさておき、日本列島の全域カバーを見通して調査を始めることにした。

ではどこから始めるかであるが、北海道と沖縄県は歴史的に本州・四国・九州とは違った歩みをしてきているので別の機会に個別に取り組むこととし、本州・四国・九州のなかでわたしにとっては未調査地域である東北地方から始めることにした。九州・四国・近畿地方など西日本は何度か調査に入っているためそれなりのイメージが描けるので、未調査地域の東北地方から始めて東日本に広げていく方が、日本列島の全体像を把握するのに効率がよいと判断したからである。

II 東北地方の在来農具の比較調査

1 調査に訪れた範囲

2003年8月より2004年8月の13ヶ月間、東北地方を中心に各市町村の博物館・資料館の収蔵庫、教育委員会の民具保管施設を訪ねて在来農具の比較調査をおこなった。その調査先は(表1)の通りである。ほかに2003年10月には北海道8箇所、12月に大阪府・奈良県2箇所、2004年3月に静岡県5箇所、愛媛県11箇所を回ったが、これらはいずれこの地方を全域調査した折りに触れることとし、今回はまとまりをもって調査した東北地方に絞って報告することにした。添付地図はその調査で訪れた市町村を年度別に色分けして示したものである。

(表2)に示したように、この13ヶ月間に調査できた施設は141箇所、同一市町村内で複数箇所調査した場合も含まれるため、市町村数では93となる。東北地方の直近の合併以前の市町村数は423なのでカバーできたのは22%となる。ところがすべての市町村が民具を収集しているわけではなく、博物館・資料館あるいは学校の空き教室等の施設に民具を収集・保管している市町村は約半数とみなして、全市町村の半数値に対する調査地数では平均44%でまだ半分にも満たない。また県別には調査地数にむらが大きく、山形県は比較的回れた方だが青森県は東半分はほとんど空白、宮城県も福島県もまだまだである。このように不十分であることはいうまでもないが、それでも東北6県をそれなりに回った効果は大きかった。調査のたびに驚きの連続であったし、古代から近代にいたる東北地方の歴史のこれまでとは違った側面が見えてきた。本稿ではその概要を報告することにした。

2 調査成果の概要

(表3)は、調査過程で目にとまった農具の所在市町村を県別に一覧にしたものである。なお青森県は東部と西部ではまるきり違うということなので2つに分けた。もともとの表は分析過程での整

理の1段階として製作した資料であって公開できるような整ったものではない。ただ13ヶ月間、諸方の資料館にお世話になった手前、調査で何が分かったのかを調査先に伝える義務はあり、そのためには内部メモも公表する必要があると判断にもとづいて掲載したものである。

わたしにとっては東北地方の調査は今回が初めてであり、調査を重ねるごとに自分にとっての「発見」を重ねていった。そのため訪れるごとに観察の着目点は増加し、同じ岩手県でも2003年8月の初回のときと1年後の04年8月の調査とでは観察の精度に雲泥の差ができてしまった。本来ならば03年8月の調査施設の再調査をおこなえばいいのだが、その暇があるなら新しいところを1市町村でも多く回って、全体の概要を把握することが先決だと判断した。したがって空白欄があってもそれはただちに「そこには無かった」ことを意味するのではなく、当初は重要と考えずメモしていなかった場合や見落としも含めて空白となっていることを十分心にとめて表を眺めていただきたい。

(表3)では耕起から脱穀・調製へと稲作の作業の流れにそって農具を配列した。それではまずその流れに沿って13ヶ月間の観察成果を概観していくことにしたい。

a 抱持立犁 (かかえもったてすき)

明治20年代前後に、北九州の馬耕教師が全国に派遣されて乾田馬耕を広めてまわったことはよく知られている。この動きをもっとも真剣に受け止めたのは犁耕の空白地帯であった東北地方で、ここでは近代短床犁がバコウとかバッコウとか呼ばれていることからその影響の大きさが知られる。こまでは先行研究で明らかにされたことで、その予備知識をもって抱持立犁には注意をはらって調査した。そこで見たのは予想を上回る影響の大きさであった。以下その点を列挙していきたい。

抱持立犁の定着度の良さ 抱持立犁は東北地方6県すべてで現物が確認できた。現物が確認できるということは抱持立犁がそれなりに長く使われていたことの結果と考えられる。

また近代短床犁では双用犁の占める割合が高く、とくに秋田県・山形県の沿岸部では近代短床犁は双用犁しかないという状況も見られる。双用犁は犁身背後のレバー操作で左反転・右反転の切り換えが可能というもので、水平梶棒が付く。ところで抱持立犁では犁先と犁へらは正面向きに付けられているが、水平梶棒の付くものが多く、手の持ち替えで犁身を左右に傾けて不十分ながら左右の鋤き分けをおこなっていたと考えられる。この左右鋤き分け操作に慣れた人達は、左反転固定の単用犁を受け付けず、双用犁を選んだ結果が収蔵庫の現状に反映しているのであろう。

また抱持立犁の定着度の良さを示すものとして、抱持立犁の地元での改良型が見られることがある。抱持立犁は緩い弓なりの犁身をもつが、これを直材の犁身の下部に別材の短床を付けた改良型が秋田県の田沢湖町・千畑町・大内町・平鹿町で見られた。大内町のは明治42年購入との墨書、田沢湖町のものには「特許」、千畑町のものには「羽後角間鎌田工場」の焼印があり、形態的にも近代短床犁の流れではなく、地元で抱持立犁を使うなかから生まれた改良型として注目される。また山形県南陽市のものは把手に括れ加工があり、同市北野資料館のものは別材把手を付けた改良が見られて、抱持立犁がある期間、地域の定型農具の位置を占めて使いつづけられていたことをうかがわせる。

犁や馬鋤を引かせる農耕鞍にも九州系の影響が強い。秋田県では九州系の千木杵単橋鞍にドーナツ形の藁座布団を付けたものが全県的に残っている。藁座布団は一般的には長方形であり、とくにドーナツ形にするメリットは考えがたいことからすれば、実用性よりは格好良さで継承されてきたと考え

るのが無理がない。抱持立犁が秋田県にデビューしたときの衝撃が大きく、鞍ごと藁座布団ごとあこがれの目で受け止められていたことの痕跡と考えられる。

抱持立犁に関する通説に再検討の余地 このような抱持立犁の定着度の良さは、近代農業技術史の通説的理解に一定の反省を迫るものといえよう。通説では北九州の馬耕教師によって抱持立犁が全国に広めて回ったが、無床犁の抱持立犁は深耕に適している反面、安定性は悪く、深耕性能は保ちながら安定性の悪さを克服した近代短床犁にとって代わられたとするもので、抱持立犁は犁の近代的改良の口火をなした点は評価するものの、寿命の短い中継ぎ役といった位置づけである。ところがいま見たように、東北地方ではまず抱持立犁段階で犁耕が定着し、それなりの期間使い続けられていたようである。いわば東北地方の近代農業技術史には「抱持立犁時代」ともいうべき1時代を置くべきなのであろう。そして仁賀保町の斎藤宇一郎をはじめ各地の資料館にはその地に馬耕を導入した先覚者達が顕彰されているが、彼らはその地の抱持立犁時代を演出した立役者であったと評価できよう。

抱持立犁の多様性 もう1点、東北各地の資料館を見ていると、同じく抱持立犁とはいっても細部では違いがあり、いくつかのタイプに分けられるようである。抱持立犁は犁身が三日月状に内湾しており、下端は犁床のように加工されている。一見犁床のように見えても使用中にこの部分が接地しないなら無床犁であり、これまでの研究者は接地していないだろうと思いきや、というよりはそういった実態には無関心で抱持立犁＝無床犁という短絡的理解で論じられてきた。ところが今回の調査では使用中に明らかに接地し犁床として機能していると思われるものが何例かあった。それが後世の改良の結果ではなく当初からそうであったと考えて差し支えないような自然な姿で接地するのである。となればその抱持立犁は犁床30cm前後の短床犁となり、抱持立犁＝無床犁だから不安定と決めつけてきた通説は全面的ではないにしても大きな修正を迫られることになる。ただこのことを論じるためには重心位置の測定を伴う精査が必要となるが、今回は前近代に重点を置いた調査なので、そこまでは行っていないしデータもまだ収集中である。いずれ事例を集積してから写真や計測データを添え、先行研究との関係も明らかにした形で別稿で論じることにしたい。

これまで抱持立犁に関わる近代農業技術史はもっぱら文献史料に基づいて研究が進められてきており、それが実態とのずれを生む結果になったのであろう。民具と総称され資料館に収集されている在来農具は、その地で展開された現実の歴史をその形態のなかに痕跡として伝えている。これが民具の「非文字資料」的側面であり、そこから歴史情報を抽出して再構成する研究が近代史においても必要であることを痛感する結果となった。

b 右反転プラウ

犁が耕起した土塊を右に反転するのを右反転、左に反転するのを左反転とよぶ。東アジアでは中国が右反転なのに対して朝鮮半島は左反転であり、日本は左反転で犁耕との初めての出会いが朝鮮系渡来人の持ち込んだ無床犁であったことを物語っている。ところで欧米は右反転で、明治になると欧米系の右反転プラウが導入された。今回その右反転プラウが東北地方各県で確認できたが、これは関西では考えられないことである。関西は古代以来犁耕の盛んな地域で左反転の長床犁が根付いており、右反転プラウはもちろん抱持立犁も受け入れていない。それに対して東北地方が抱持立犁も右反転プラウも受け入れたのは、古代以来の犁耕の伝統がなかったことによると考えられる。伝統の縛りがな

かったので馬耕教師の持ち込む抱持立犁を新鮮な気持ちで受け入れたし、右反転プラウも使い勝手が悪いなどの拒否反応が起こることなく素直に受容したようである。となれば抱持立犁の定着も右反転プラウの受容もその遠因はといえば、朝鮮系渡来人が左反転無床犁を持ち込んだ6世紀には東北地方は大和の支配圏外であり、大化改新政府が左反転長床犁を全国に流した7世紀にも東北地方はその支配圏外だったという歴史的事情があり、それが19世紀にまで影響を及ぼしていたことになる。このことは日本列島にも歴史は地域ごとに異なった歴史が展開していて、かつそれは後世の社会のあり方を規定するものであったという事実を示すとともに、民具の非文字資料としての側面は、それを伝える情報をゆたかに内包しているということを示している。

この右反転プラウは秋田県鹿角市の柳沢家や渡部家、宮城県登米町の大野家に收藏されていた。酒田の大地主本間家が乾田馬耕の導入、つまり抱持立犁の導入に力を入れていたことはよく知られているが、柳沢家や渡部家、大野家は旧名主クラスの村のリーダーであり、これらの家の右反転プラウは、彼らが伝統に固執せず洋風の新技术を積極的に摂取しようとしていたことを示すものとして注目される。

c 馬鋤（まぐわ）

引手なし馬鋤が全県に分布 馬鋤は牛馬に田植えに先立って水を張った田面を縦横に掻き、碎土と均平をおこなう農具であるが、歯を植えた台木の両端から前方に2本の引手が出ていて、この先端に馬の鞍から伸びた引綱をかけて引かせていた。この引手は簡単な棒ながら、自動姿勢制御装置としての役割をもっている。この馬鋤は中国江南地方で開発されて周辺諸国につたわり、日本には5世紀に導入されたが、中国でも朝鮮半島・東南アジアでもそして日本各地の馬鋤にもすべて引手は付いている。ところが昨年8月の第1回の東北地方調査で二戸市歴史民俗資料館で引手なしの馬鋤に出会った時は、わが目を疑うほどの驚きであった。その後の調査で東北6県すべてでその存在が確認できた。

また今回の調査で江戸時代以降の絵画資料にも引手なし馬鋤は描かれていることが確認できた。青森県柏村の坂本家屏風、秋田県増田町の月山堂奉納絵馬、山形県致道博物館蔵「大泉四季農耕図」、おなじく致道博物館蔵の明治5年(1872)の「農具図絵」の4点である。このほかにもこれまでに知られている「四季耕作図」類をチェックすれば、なお何点かは見つかる可能性はある。

絵画は写真ではないので、その図柄が即その地の農業を描いたものとはいえ、その絵に描かれた農具や農作業が絵手本からの借用なのか実際にその地の農業を描いているのかどうかのチェックが必要となる。この点に関しては、1996年以降に民具・民俗研究者の間で盛り上がった四季耕作図研究のなかで、江戸時代に入って和風化した四季耕作図でよく用いられる粉本には『絵本通宝志』、『女大学宝箱』等があることが明らかになっているが、今回あげた4点の資料にはそれらの粉本は一切用い⁽²⁾られておらず、スケッチあるいは日頃のスケッチの蓄積の上で描かれたと考えられ、信頼度はかなり高いと考えられる。

情報にもとづく再現製作に起因 馬鋤にとっては引手は自動姿勢制御装置としての役割をもった重要な部品であり、東北地方に馬鋤そのものが伝来したなら引手が欠けるはずはない。ここからまず馬鋤が日本に導入され全国的にひろまった5～6世紀に東北地方には伝わっていなかったことが導かれる。このことは古墳時代には東北地方は蝦夷の世界であり、大和政権の支配圏外であったという歴史の流

れと矛盾しないので、信頼できる結論といえよう。その後何らかの機会に東北地方の人々が他地方で馬鍬の使用を見てその便利さに驚き、家に帰ってから記憶に頼って再現製作した。使用時には馬鍬の引手と引綱は一直線になっているので見落とされる可能性が高く、引手なし馬鍬が生まれてしまったのであろう。これは自動姿勢制御装置を搔いているので不安定で使いにくかったが、一旦地域に定着してしまうと、馬鍬を使いこなせないようでは男ではないという社会的規制がはたらくので若者は習熟に努め、その結果、引手なし馬鍬は地域の定型農具として定着したものと考えられる。

内湾柱は九州系馬鍬の影響 馬鍬の台木には鳥居形把手が立てられ、農夫はその笠木にあたる横棒を押さえて作業にあたるが、この笠木を支える左右の柱には地域的特色がある。関西では直棒をほぼ平行に立てるので「平行柱」、関東地方はカタカナのハの字形に下が開くので「ハ字柱」、九州地方は左右の柱が内湾して上部が狭まるので「内湾柱」と呼ぶことにしている。ところで東北地方はいうとほとんどが内湾柱なのである。これはある時期、九州の馬鍬の強い影響を受けた痕跡と考えられる。その時期とは抱持立犁を持ち込んだ馬耕教師たちの到来の時であろう。

北九州の馬耕教師たちが抱持立犁とともに馬鍬も持ち込んだことはすでに知られているが、研究レベルではもっぱら抱持立犁に注目があつまり、九州系馬鍬が中心テーマに取り上げられることはなかったといっている。把手柱の形状は馬鍬の性能には直接関係せず、内湾柱がとくに優れているわけではない。それどころか平行柱やハ字柱が棒材を利用するので堅牢なのに対して、内湾柱は板材から切り出すので木目の走行方向と外れる場合があり、使用中に木目に沿って割れてしまったものが何例か収蔵庫で確認できる。内湾柱は道具としてはむしろデメリットの方が多いのである。にもかかわらず東北全県を席卷したのは道具としての合理性以外の理由、おそらく内湾柱はすばらしく格好良かったのであろう。それは引手なし馬鍬地帯に突如引手付き馬鍬が現れたことによる衝撃と考えられる。このことは東北地方の人々にとっては馬耕教師との出会いがすなわち引手付き馬鍬との出会いであり、それが東北地方の馬鍬の技術革新を引き起こしたと考えられる。これはこれまでの近代農業技術史では見落とされていた点であり、民具の非文字資料的側面からの研究が近代史にも有効であることを、またしても証明する結果となった。

鉄棒引手が主流 馬鍬の引手は一般に木製であるが、東北地方では鉄棒引手が主流を占める。これは使用中の引手なし馬鍬に引手を後付けする場合、鑿で四角い柄穴を穿孔しなければならない木製引手よりは螺旋錐で台木に丸穴を開ければ済む鉄棒引手の方が簡単であり、鍛冶屋がそれを請け負ったというような事情があって、新製品も鉄棒引手になってしまったものと推測される。

ここまでは小論「東北地方の引手なし馬鍬」で報告した通りであるが、今年度の調査でさらに新たな発見があった。⁽³⁾

古形を残した股本引手・板鉤引手が点在 馬鍬の引手には西日本で見られる棒の先端に括れ加工を施したものの他に、枝分かれ材を鉤として使った「股本引手」やそれが様式化して板材から鉤を削りぬいた「板鉤引手」があり、この両者は関東・中部地方で主流を占めている。今年度の調査で小振りで煤けて見るからに使用年代の古そうな股本引手の馬鍬が東北地方に点在していることが確認できた。これは関東・中部地方から古い時期に持ち込まれたものの後裔と考えれば辻褄が合う。そして古代においての関東・中部地方からの持ち込みとなれば、律令国家の対蝦夷戦争での城柵の建設と、それを守備する要員として関東・中部地方の農民を柵戸として移住させたこととの関連が考えられる。

股本引手の分布状況についてはなお精査を要するが、秋田県では弘田柵跡に近い田沢湖町や千畑町で古形の股本引手馬鍬が見つかり、岩手県では滝沢村の駿河家に股本引手馬鍬があったが、その駿河家には先祖が駿河から移住してきたという伝承があるとのことで、古代の柵戸の移住にともなう股本引手馬鍬の持ち込みという仮説は、現実味をおびてきている。

股本引手馬鍬が柵戸とともに持ち込まれ地域の定型農具として定着したとするなら、先に引手なし馬鍬の成因について述べた「他地方で馬鍬の使用を見て家に帰り、記憶に頼って再現製作した」とした「他地方」とは東北地方内部の柵戸の周辺となり、東北地方史として無理のない想定となろう。

d 荷 鞍

後枠後傾型荷鞍 荷鞍の前枠と後枠は横から見れば平行で直立しているのが一般的な形態であるが、岩手県や宮城県では後枠が後傾した荷鞍が広く使われていた。後枠が後傾するのは乗馬鞍の特徴で、7世紀に遣唐使を通じて導入された唐鞍にはじまり、大和鞍に継承されて日本の乗馬鞍の標準型となった。岩手県や宮城県の後枠後傾型荷鞍は、この地にまず乗馬鞍が伝わり、鞍の後枠は後傾したものという固定観念が成立して以降に荷鞍がそのものではなく情報として伝わり、情報にもとづいて再現製作されたために後枠後傾型荷鞍が成立したと考えれば辻褄が合う。

乗馬鞍が先で荷鞍の使用はかなり遅れたとなると、馬は飼いながら乗用には使うが荷物は運ばせなかったという一見不自然な飼育がおこなわれていたことになる。ところで古代の東北地方は有名な馬産地であり、貴族は競って名馬を手に入れようとし、奥州藤原氏にとっては重要な交易品であったし、摂関家などに馬を贈るなど外交の手段としても使われていた。ここでは馬は高級な商品であり、馬産地として大事に飼われていたのであろう。この文献史料から見える古代の状況は、民具の後枠後傾型荷鞍から推測した結果とは矛盾せず、両者は検証しあう関係にあるように見える。ただこれはまだ調査不十分な段階での仮説であり、今後の精査によって分析を深めたいと考えている。

ところでじつは鹿児島県の荷鞍も後枠後傾型である。鹿児島県は東北地方と同じく古代では異民族の居住地であったことからすれば、上記の推定はより確実性を増したといえよう。

農耕鞍をニグラと呼ぶ地方 農耕鞍は一般に「代鞍」「代搔き鞍」「鞍」などと呼ばれているが、農耕鞍を荷鞍と呼ぶ地方のあることが4県で確認できた。その理由としては荷鞍が先に使われていて、農村で鞍といえば荷鞍しかなかった時代が長く続き、その後に農耕鞍が入ってきたために農耕鞍もニグラと呼ぶようになったと考えれば辻褄が合う。そうなれば馬鍬の導入が遅れたという先の結論ともうまく符合する。この点はなお事例の収集が必要で、ひとまず仮説を示しておくことにしたい。

e 踏鋤およびマル・コロバン・ゴロ

岩手県や青森県には畑の耕起具として刃先を付ける鋤平と柄が一木造りの踏鋤が用いられてきた。同型のは長野県に見られるが、他地方にはない。これについては朝鮮系渡来人の持ち込んだ踏鋤のタビを縄文系住民が一木造りの技術で受け入れたものと解釈しているが、同型のものが広い関東平野をはさんで長野県と東北地方に分布することの説明がつかなかった。今回の調査では次の仮説が浮上した。すなわち踏鋤を使っていた信濃の住民が柵戸に指名されて岩手県に入植し踏鋤が定着した。その後南部氏の支配下で殖産興業政策の一環として領域内に広められた。これで一応の説明がつく。

またマルとかコロバシとかゴロとか呼ばれる回転整地具が東北地方で使われていた。調査の当初はメモの対象にしていなかったので(表3)は著しく不備であるが、東北各地で見られるものである。これは元は馬鍬と同じく4世紀中国の漢族の長江流域への民族大移動にともなって開発されたものと考えられるが、日本では近畿地方にはなく、これまで伝来事情がつかめなかった。ところがこの回転整地具は長野県でも使われており、踏鋤と似通った分布を示している。となればマルは踏鋤と同じく朝鮮半島伝来で、同時期に相伴って中部地方から東北地方に持ち込まれたと考えれば辻褄が合う。

これらから東北地方の解明には中部地方の全県調査が欠かせない課題であることが痛感された。

f 木摺臼(きずるす)

4形態が南北に棲み分け 木摺臼は粃から粃殻をはがして玄米を取り出す粃摺りに使用する往復回転の臼で、朝鮮半島伝来と考えられる。中国系で全回転の土摺臼よりは1層位古い。

昨年度の調査で東北地方には、北から4本把手型、2本把手型、クランク型、縄引き型の4形態が北から南へきれいに棲み分けていることが明らかになった。今年度の調査で福島県は縄引き型であり、その北限は山形県におよんでいることが明らかになった。そこからその分布の形成にいたる歴史的事情を次のように推定してみた。

縄引き型の分布には律令国家が関与か 往復回転で放射目の木摺臼は朝鮮系であり、朝鮮半島では2本の把手が付いて2人が立ち姿勢で操作する。これが日本に伝来して座姿勢で2人が脚を投げ出して向き合い、左右の手で交互に縄を引き合う縄引き型に改良された。この下限は10世紀末～11世紀初頭の『枕草子』であるが、上限はこれまで絞り込めなかった。今回福島県も縄引き型と確認できたが関西はもちろん関東・中部地方も四国も縄引き型と考えられるので、福島県以南はほぼ全国的に縄引き型であったことになる。商品経済が未発達な古い時代に全国的に縄引き型であったとなれば、政府が関与した可能性が高くなる。すでに別稿で大化改新政府が殖産興業政策の一環として長床犁の模型を全国の評督(のちの郡司)の手元に届けていたことを論証した。またカラスキとともにカラサオ・カラウスというカラの付く農具はセットで全国的に流されたとの見当もつけていたが、粃摺り用の縄引き型木摺臼も、そのセットに加わっていた可能性が高まってきた。

2本把手型・4本把手型は朝鮮系 岩手県を中心に分布する2本把手型は、軸受け棧を除けば2本把手も立ち姿勢も朝鮮系そのものである。これが岩手県に分布することについては次のような仮説を立ててみた。2本把手型が立ち姿勢であることは、畿内での改良を経ていないストレートな朝鮮系である。こういうストレートな朝鮮系民具は犁でいえば7世紀後半の百済・高句麗難民の持ち込みに見られる。この論理を適用すれば2本把手型も百済・高句麗難民による持ち込みの可能性が高い。それは大化改新政府の縄引き型普及政策より後に渡来したために、政府モデルの影響を受けなかったと見られるからである。関東・中部地方で故国の2本把手型を使い続けていた百済・高句麗難民の何世代目かの子孫が、律令国家の柵戸に指名されて陸奥国に移住した。そのときに2本把手型も東北地方に持ち込まれ、その後裔が岩手県の2本把手型と考えるのである。そして4本把手型は2本把手型の二次的伝播地での改良型であろう。

菅江真澄も見たクランク型 クランク型は縄引き型が江戸時代中期に改良されたもので、その途中経過を示すものが菅江真澄のスケッチに残されており、絵馬からは腰掛け姿勢で動かしたことが確認で

きている。またこの改良は『会津農書』の記述にも関係すると思われるが、福島県調査の結果と『会津農書』の記述にはずれがある。これらについてはいずれ別稿で詳しく論じることにはしたい。

g 碓（からうす）・薦槌（こもづち）

碓とは中央を支点で支えた角材の竿の一端を脚で踏んで米を搗く踏臼で中国起源であり、先にも述べたように大化改新政府の政策によって犁などとともに全国的に広められたものとの見当をつけてきた。今回東北地方では流水を利用したバッテリーはあるが、碓はほとんど見かけず、米搗きはもっぱら臼と重い杵でおこなわれていたことがほぼ確認できた。この碓の欠如は、東北地方が福島県を除いて大化改新政府の支配圏外であったという歴史的事実とうまく重なりあう。

俵編み機の薦槌は砂時計型が一般的であるが、俵は米を輸送するパッケージであることからして、これも大化改新政府が全国的に流した可能性が高いと考えている。東北地方には水滴断面型も分布するが、これは二次的伝播の改良型と見るのである。これらの検証のためには関東・中部地方の全県調査がやはり不可欠である。

以上、現時点での仮説を列挙したが、これらはいずれ東北地方の精査や関東・中部地方調査を経てデータを集積したうえで、写真や計測データを掲げ、先行研究との関係も明示した論文として個別に提示していくことにしたい。

3 来年度以降の調査計画

以上の13ヶ月間の調査結果から、来年度以降の調査計画がおのずと絞り込まれてきた。1年あまりで東北地方の概況調査をやったペースからすれば、残る3年間でできるのは関東・中部地方の調査と東北地方の精査がほぼ限度であろう。そして東北地方と関東・中部地方の関係が予想以上に深いことが分かったいま、それは妥当な選択といえよう。さらにもう1点、韓国調査が望まれる。東北地方には関東・中部地方に入植した朝鮮系渡来人の影響が予想外に強いことが見えてきたからである。

III 文献からの歴史と民具からの歴史

以上の東北地方の調査概報からも分かるように、民具の非文字資料としての側面からアプローチから、これまで文献史料に寄りかかってきた歴史とは違った面が豊かなりアリティィーをもって蘇ってきた。その文献史料からの歴史研究と民具からの歴史研究の持ち味の違いを（表4）にまとめてみた。

これで見れば民具の非文字資料としての側面から引き出せる歴史情報は、文献史料からのそれとはまったく対照的に、『古事記』や『日本書紀』ではカバーしきれない全国どこもの、一般庶民の、生活に密着した情報が得られ、中央政府や藩の政策ではあっても記録に残りにくい殖産興業政策や技術導入に関する政策も、民具からは確実に痕跡をたどることができるというメリットをもっている。ただこれを引き出すには広域の比較が必要であり、全県調査、全国調査といったスタイルをとる必要があることは、これまで見てきた通りである。

IV 地域おこしの核としての民具

フランス人研究者と話していた際、日本の民俗資料館の密度の高さに驚かれたことにこちらが驚いた。日本では1970年代前後に各地に歴史民俗資料館が作られたが、日本の市町村数を約3,000と見て、その約半数が何らかの形で民具を収集しているとするなら、その数は約1,500となる。これを生かせば日本列島を1,500ドットでカバーする精細な民具分布図を作れるわけで、ここから各地それぞれの個性豊かな歴史が復原できるであろう。これは貴重な財産である。

ところがいま、その資料群は危機に瀕している。民具は地元の人々にとっては懐かしいが珍しいものではなく、そのうえ民具は嵩張り埃をかぶると汚く見えて、がらくた扱いをされることになる。それに拍車をかけるのが近年の市町村合併で、だぶる民具は廃棄処分されたという噂を耳にする昨今である。その原因を突き詰めれば、民具の非文字資料としての側面からアプローチする研究がまだ少なく、その成果が地域に還元されていないことに尽きるといえよう。

消費経済の深化とともに地域の特性は失われて文化の均質化が進み、グローバル化が叫ばれるなか、日本とは何か、自分の暮らす地域とは何か、そのアイデンティティーが問われている。その自分の足元を見直し、地域おこしの核となりうる可能性を秘めたものが非文字資料としての民具である。したがって、全県調査、全国調査によってその豊かな歴史情報を引き出し、それを地域に還元するという新しいスタイルの研究が望まれているといえよう。

その必要を痛感するなかで、2004年度の調査からは、調査ごとにニューズレターを発行して地元に戻す活動を始めた。末尾に掲げたのはその1例で、模索中の試みである。

以上述べてきたような、調査を通しての非文字資料からの情報抽出法の開発や研究成果の蓄積、その研究成果を地元に戻す双方向性をもった研究スタイルの模索等を含めた総体が、わたしにとっての非文字資料の「体系化」の中身である。

注

- (1) 河野「馬鍬の伝来——古墳時代の日本と江南——」(『列島の文化史』7号, 1990年, 河野『日本農耕具史の基礎的研究』(1994)に「馬鍬の導入——古墳時代の日本と江南——」と改題して加筆所収, 21頁), 河野「オナグラ・ウナグラ考——首かせ付き首木のたどった道——」(『列島の文化史』5号, 1988年, 河野『日本農耕具史の基礎的研究』(1994)所収, 129頁), 河野「周防のウナグラ」(1)(2)(『民具マンスリー』1990年, 河野『日本農耕具史の基礎的研究』所収, 185頁), 河野『日本農耕具史の基礎的研究』(和泉書院, 1994年)第5章第4節「単橋鞍の成立過程」, 河野「民具の掣調査にもとづく大化改新政府の長床掣導入政策の復原」(『ヒストリア』第188号, 2004年), 194頁。
- (2) 冷泉為人・河野通明・岩崎竹彦『瑞穂の国・日本——四季耕作図の世界』(淡交社, 1996年), 80, 104頁。
- (3) 河野「東北地方の引手なし馬鍬」(『民具マンスリー』第37巻1号, 2004年4月), 15頁。
- (4) 河野「東北地方の木摺臼の全域調査——身体技法から日本列島の民族的多様性を検出する試み——」(神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号, 2004年3月), 36頁。

表 1 東北地方調査先

青森県

市浦村歴史民俗資料館
中里町立博物館
金木町歴史民俗資料館
五所川原市 旧平山家住宅
五所川原市歴史民俗資料館
深浦町歴史民俗資料館
弘前城史料館
板柳町立郷土資料館
田舎館村博物館 埋文センター
青森県立郷土館
青森市歴史民俗展示館(稽古館)
三内丸山遺跡
平賀町郷土資料館
小川原湖民俗博物館
八戸市博物館

秋田県

大館市郷土博物館
大館市立鳥潟会館 郷土資料庫
鹿角市花輪図書館 民俗資料室
渡部家史料館 土蔵
八幡平小学校 郷土資料室
八幡平公民館
柳沢家 倉庫・土蔵・井戸
大湯ストーンサークル館
二ツ井町歴史資料館
琴丘町立歴史民俗資料館
若美町ふるさと資料館
井川町歴史民俗資料館
昭和町歴史民俗資料館
秋田県立博物館
秋田県立博物館 旧奈良家住宅
岩城町 天鷲村 佐々木家住宅
仁賀保町勤労青少年ホーム展示室 斎藤宇一郎記念館
仁賀保町 旧佐々木家住宅
矢島町郷土資料館
矢島町 土田家住宅
大内町 出羽伝習館
大内町 民俗資料収蔵庫
象潟町郷土資料館
秋田県立農業科学博物館
中仙町長野公民館 民具収蔵庫
田沢湖町郷土史料館
協和町大盛館 展示室・収蔵庫
千畑町郷土資料館
秋田県埋蔵文化財センター展示室
松田柵跡
大曲市民俗資料館(花館民俗資料館)
雄物川町郷土資料館
雄物川町立民家苑 木戸五郎兵衛村
平鹿町農村文化伝承館
十文字町十字館 歴史資料展示室
増田町ふれあいプラザ 郷土資料館
羽後町歴史民俗資料館
秋之宮博物館(雄勝町)

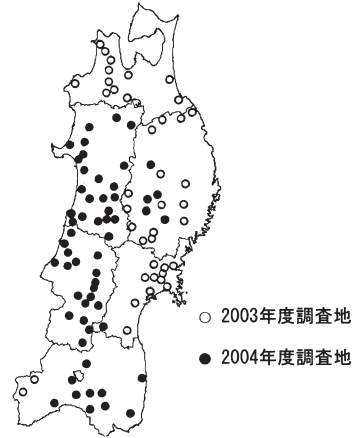
山形県

遊佐町教委 菅里収蔵庫
酒田市立資料館
庄内米歴史資料館・山居倉庫
城輪柵跡
立川町歴史民俗資料館
余目町資料館
致道博物館
松ヶ岡開墾記念館
新庄ふるさと歴史センター
大石田町立歴史民俗資料館
村山市農村文化保存伝承館
河北町紅花資料館
大江町歴史民俗資料館
大江町 小倉交流館
山辺町ふるさと資料館
山辺町 玉虫湖畔荘
中山町立歴史民俗資料館
山形市郷土館
山形県立博物館
長井市古代の丘資料館
夕鶴の里 資料館(南陽市)
南陽市 民具収蔵庫
南陽市 北野資料館 民具とくらし
高畠町郷土資料館
山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
米沢市上杉博物館
米沢市埋蔵文化財資料室
農村文化研究所 置賜民俗資料館

福島県

只見町 朝日公民館
只見町 川のものしり館
金山町 こぶし館 民俗資料展示室
奥会津地方歴史民俗資料館
会津民俗館
福島県立博物館
野口英世記念館
天栄村ふるさと文化伝承館
天栄村 民具収蔵庫
長沼町歴史民俗資料館
須賀川市立博物館・歴史民俗資料館
双葉町歴史民俗資料館
白河市歴史民俗資料館
白河関跡・ふるさとの家移築民家
石川町立歴史民俗資料館
いわき市暮らしの伝承郷
勿来の関跡
いわき市勿来関文学歴史館

青森県	15
岩手県	26
宮城県	16
秋田県	38
山形県	28
福島県	18
合計	141箇所



岩手県

種市町立歴史民俗資料館
軽米町歴史民俗資料館
二戸市歴史民俗資料館
浄法寺町歴史民俗資料館
滝沢村教育委員会 民具収蔵庫
滝沢村 駿河家の蔵(滝沢村)
岩手県立博物館
碧祥寺博物館
湯田町歴史民俗資料館
道の駅厳美溪
胆沢町文化創造センター郷土資料館
石鳥谷町農業伝承館
花巻市歴史民俗資料館
岩手県立農業科学博物館
北上市江釣子史跡センター
北上市江釣子民俗資料館
北上市立博物館
川井村北上山地民俗資料館
遠野市立博物館
東和町ふるさと歴史資料館
住田町民俗資料館
前沢町 牛の博物館
平泉郷土館
千葉氏宅倉庫
えさし郷土文化館
藤原の郷

宮城県

金成町歴史民俗資料館
迫町歴史博物館 旧亘理邸・民具展示館
登米町教育委員会
大野家歴史民俗資料館
豊里町教委 籠神収蔵庫・民具収蔵庫
桃生町教育委員会
桃生町町民総合センター 民俗資料館
小牛田農林高校 旧斎藤報恩農業記念館
北上川運河交流館 水の洞窟
瑞巖寺宝物館
塩竈神社博物館
東北歴史博物館
仙台市歴史民俗資料館 向田収蔵庫
仙台市歴史民俗資料館
角田市郷土資料館
七ヶ宿町水と歴史の館

表 3 東北地方在来農具の市町村別分布

種別	タイプ	青森(西部)	秋田	山形	青森(東部)	岩手	宮城	福島	
犁	抱持立犁		若美、農業科学博物館(尻柳くくり)、田沢湖(尻柳くくり)、千畑、平鹿、矢島(尻柳くくり)、矢島土田家、大内、仁賀保	置賜、高島、南陽、南陽北野家、遊佐、余目、松ヶ岡	小川原湖	花巻 沢内、胆沢、胆沢(農業科学博物館)、平泉	東北歴博、桃生、金成、志波姫、仙台歴民、角田	福島県博、会津民俗館、天栄、いわき、双葉	
			板柳、五所川原、田舎館	南陽、南陽北野家、高島、中山(尻柳括り)、大石田、村山、大江、山辺		滝沢駿河家、花巻、石鳥谷、江刺、軽米、北上、前沢牛の博物館、沢内、胆沢、一関道の駒藏美梁・川崎・江刺(農業科学博物館)	七ヶ宿、桃生、登米大野家、金成、志波姫、迫町、仙台歴民、角田	福島県博、田島、天栄、双葉、只見、いわき	
	双用犁		農業科学博物館、協和、雄勝秋之宮	新庄					
	左反転	五所川原、深浦	鹿角渡部家、昭和、若美、井川、琴丘、岩城、秋田県博奈良家、農業科学博物館、中仙(尻柳くくり)、田沢湖、協和、雄物川、羽後、矢島、大内、大内伝習	新庄		軽米、種市・久慈・矢巾(農業科学博物館)、石鳥谷	豊里、登米大野家	天栄	
	右反転ブラウ		鹿角柳沢家、鹿角渡部家、若美、農業科学博物館、千畑、協和、大内	新庄	小川原湖				
馬 鍬	引手なし	柏村坂本家屏風	鹿角渡部家、若美(痕跡)、増田町絵馬	山形県博、中山、大江、山辺	小川原湖	軽米、二戸、岩泉(農業科学博物館)	七ヶ宿	石川	
			秋田県博、昭和、井川	松ヶ岡、遊佐		北上、滝沢駿河家、花巻、滝沢(農業科学博物館)			
	股木鉤引手		千畑、協和				本吉(東北歴博)	田島	
	板鉤引手 八字柱 内湾柱 or 未確認		農業科学博物館、田沢湖、雄物川	山形県博、新庄			北上、花巻、石鳥谷、山田(農業科学博物館)	志波姫	只見、会津民俗館
			秋田県博	置賜			滝沢		福島県博、石川、いわき、須賀川、双葉、野口英世記念館
下面突起引手			山形県博、置賜、高島、米沢、南陽、南陽北野家、大江			江刺、北上、前沢牛の博物館、遠野、東和、胆沢、千葉家、東和(農業科学博物館)	仙台歴民、角田、川崎(東北歴博)	只見	
棒先括れ引手		矢島	余目				亘理(東北歴博)		

表 3-(2)

種別	タイプ	青森(西部)	秋田	山形	青森(東部)	岩手	宮城	福島
農耕鞍	千木枠 単橋鞍		鹿角花輪、秋田県博、秋田県博奈良家、若美、農業科学博物館、中仙、大曲、千畑、協和、羽後、平鹿、大内、矢島(写真)					
			昭和「田掻き鞍」、井川、仁賀保	遊佐、松ヶ岡、中山、新庄	小川原湖	花巻、軽米、農業科学博物館	豊里、仙台歴史民	福島県博
		千畑、協和、大内	山形県博、大石田、米沢			花巻「ヤコギ」、沢内(農業科学博物館)	桃生、金成	田島、白河
		五所川原	秋田県博、井川、大曲、協和	置賜		滝沢駿河家		須賀川、双葉
			鹿角花輪			花巻「田掻き鞍」、沢内「田掻き鞍」、平泉	桃生「代掻き荷鞍」、金成「荷鞍」	田島
荷鞍	後枠後傾型		平鹿			北上、花巻、江刺、前沢牛の博物館、平泉、胆沢	巻米大野家、金成、志波姫、迫町、仙台歴史民、角田、宮崎(東北歴博)	
踏 鋤	一木造り柄の鍬	中里、深浦、金木、五所川原、田舎館、稽古館、坂本冢屏風	鹿角花輪、大館、秋田県博奈良家、琴丘、農業科学博物館、田沢湖、大曲	山形県博、新庄、米沢、古志田東遺跡(平安)	小川原湖	種市、軽米、二戸、遠野、千葉家、江刺、九戸、葛巻、室根、川崎(農業科学博物館)	角田、本吉(東北歴博)、七ヶ宿	福島県博、会津民俗館、只見、天栄、石川
		板柳、深浦、金木、田舎館	鹿角花輪、鹿角柳沢家、大館、大館鳥潟、秋田県博奈良家		小川原湖	種市、軽米、二戸、住田、千葉家、岩手県博、九戸、葛巻、岩手、普代、岩泉、遠野、東和、沢内、久慈(農業科学博物館)		
マル・コロハシ・ゴロ		青森郷土館	田沢湖		小川原湖	江刺：落合Ⅱ遺跡(平安)、藤沢、大船渡、住田、遠野(農業科学博物館)	気仙沼(東北歴博)	

表 3-(3)

種別	タイプ	青森(西部)	秋田	山形	青森(東部)	岩手	宮城	福島
木 摺 臼	4本把手型	青森郷土館、坂本家屏風(土摺臼改良)			小川原湖	滝沢、軽米、軽米(農業科学博物館)、二戸、浄法寺		
	2本把手型	稽古館		大石田	八戸(?)	北上、石鳥谷、花巻、川井、遠野、沢内、住田、釜石(農業科学博物館)	迫町	
	クランク型		雄勝秋之宮(収集県不明)	山形県博、松ヶ岡		花巻(2本把改造)、北上市博、前沢牛の博物館、東和、住田、沢内、胆沢、平泉、一関道の駅蔵美溪、千厩(県博)、宮守(農業科学博物館・2本把手改造)、大東(農業科学博物館)		
	縄引き型			置賜、致道		矢巾(農業科学博物館)		福島県博、野口英世記念館、会津民俗館、田島、只見、金山
土 摺 臼	十字台座	青森郷土館	鹿角花輪、大館、平鹿	山形県博、置賜、高島、遊佐、南陽	小川原湖	花巻、北上、軽米、北上、前沢牛の博物館、遠野、胆沢、平泉	小牛田、迫町、仙台歴民	会津民俗館、田島、いわき、須賀川、天栄、長沼、双葉
	円盤台座	田舎館、深浦	昭和、秋田県博、中仙、田沢湖、大曲、千畑、雄物川、大内、大内伝習	遊佐		沢内、住田		
薦 槌	砂時計型			米沢:古志田東遺跡(平安)		江刺:落合II遺跡(平安)、石鳥谷		
	水滴断面型	五所川原(コモンズ)	鹿角花輪、大館、井川、仁賀保、大曲、協和、羽後、平鹿、矢島土田家、大内	南陽北野家、大江		花巻		
	円筒型		秋田県博奈良家			北上、滝沢、花巻		
碓(からうす)						滝沢	会津民俗館	
米 搥 き 杵、米 搥 き 臼		青森郷土館、深浦、板柳、深浦	鹿角花輪、昭和、若美、井川、中仙、大曲、雄物川、大内	山形県博、中山、村山		沢内、江刺	桃生、登米大野家、仙台歴民	
	唐 杵					花巻・石鳥谷「ふりうち」、二戸「ふりうち」、大東、東和、住田「ふるいりうち」、一戸・山田・遠野・岩泉・矢巾(農業科学博物館・ふりうち)、矢巾(農業科学博物館・れんが)、大東(農業科学博物館・からうす)	仙台歴民	天栄「くるり」、双葉

表 2 県別にみた調査施設数・市町村数 および 民具収集市町村概数に対する調査市町村の割合

	調査施設数	a	b	調査市町村の割合 (a/b)	c	c に対する調査市町村の割合 (a/c)
		調査市町村	市町村総数		民具を収集している可能性のある市町村 (b/2)	
青森県	15	12	93	13%	47	26%
岩手県	26	16	58	28%	29	55%
宮城県	37	12	70	17%	35	34%
秋田県	29	23	70	33%	35	66%
山形県	17	18	44	41%	22	82%
福島県	18	12	88	14%	44	27%
計	142 箇所	93	423	22%	212	44%

表 4 文献からの古代史と民具からの古代史

	カバーできる地域	記録される階層	記録される内容	内容の性格	年代	殖産興業政策技術導入政策
文献からの古代史 (対照的)	都とその周辺 ↑ ↓	天皇・貴族 ↑ ↓	政治・外交 ↑ ↓	事件性のあるもの ↑ ↓	年代の特定が可能 ↑ ↓	記録されにくい ↑ ↓
民具からの古代史	全国どこでも	一般庶民	生産・生活＝経済	日常的なもの	時代幅の限定なら可能	痕跡は確実に残る

神奈川大学OGEプログラム "人類文化研究のための非文字資料の体系化"

東北地方の民具の比較調査 — 秋田県-1

2004. 5. 26 / 神奈川大学経済学部教授 河野 通明

お世話になりました

先日の調査の折にはご親切にいただき、ありがとうございました。今回は同僚の大里浩秋氏の故郷の鹿角市・大館市の調査。岩尾昌子氏には事前にお手配いただいた上、21日は秋元信夫氏、22日は古澤三樹夫氏、23日は岩尾氏の車で解股付きで案内していただいたので、短期間で密度の高い調査ができました。行く先々でも多くの方々にお世話になり、深く感謝しております。

神奈川大学の「非文字資料」研究の一環

神奈川大学では、文部科学省の研究拠点形成事業の一環として「非文字資料の体系化」に取り組んでいます。大里氏も河野も、この研究グループに属しています。民具から地域ごとの庶民の歴史を解明

『古事記』『日本書紀』などの文献史料には、地方の庶民生活は書かれていません。ところが庶民の暮らしとともにあった民具の形や呼称には、その土地の古代以来の生活情報が、いわば遺伝子として保存されています。その遺伝子を比較調査で引き出し、地域ごとの個性ある歴史を復原する研究で、今回は秋田県調査の第1回です。

木摺臼は発見できず

土摺臼の伝来以前、初摺りには木摺臼が使われていました。木摺臼を把手を握って立って動かすのか、お尻を地面につけて縄を引くのか、形と作業姿勢の違いは、伝播経路や使い手の民族系譜をさぐる手掛かりになると注目していますが、残念ながら木摺臼には出会えませんでした。この地では土摺臼との交代が早かったようです。

花輪図書館民俗資料室に九州型農耕鞍

花輪では単編鞍にドーナツ形籠座布団を敷いた九州型の農耕鞍が見つかりました。明治20年代に北九州の馬耕教師が鞍の普及のためにこの地に来ていたことの手掛かりとして注目しています。工藤正広氏によれば田植は女が中心だが手のすいたときは男も手伝うとのこと。花輪図書館民俗資料室の解説パネルでも女でした。

10月まで秋田・山形・福島県の概況調査

今年度は年報原稿の締切が11月。鹿角・大館はおかげで概観できましたので、秋田の他地方や山形・福島県を駆け足で回って、東北地方の概況をまとめる予定です。

No.	日付	種	調査先
1	5月20日	木	鹿角市花輪図書館民俗資料室
2	5月21日	金	花輪図書館民俗資料室 ②
3			渡部家史料館 蔵
4			八幡平小学校 郷土資料室
5			八幡平公民館
6			鹿角市先人顕彰館
7			拾館跡(新毛馬内城・桜庭城)
8	5月22日	土	大館市立鳥湯会館 郷土資料庫
9			大館市郷土博物館
10			花輪図書館民俗資料室 ③
11	5月23日	日	柳沢家 倉庫・蔵・井戸
12			大湯ストーンサークル館

花輪図書館民俗資料室、鳥湯会館、大館市郷土博物館では後袴直立・飾り金具なしのタイプが確認できました。渡部家で引手なし馬鞍

昨年、岩手・青森県で引手なし馬鞍を見つけました。これは馬鞍が中国から導入された5世紀に東北地方は大和政権の支配圏外だったことを物語る資料です。では秋田県はどうか。石鳥谷の渡部家の蔵では、把手が壊れ残った引手なし馬鞍を発見、よくぞ捨てずに残してくださった。江戸時代タイプの貴重な資料です。

柳沢家に右反転の洋式ブラウ

犁で土を耕起するとき、進行方向の右に土を返すのを右反転、左に返すのを左反転といいます。中国は右反転で朝鮮半島は左反転、日本は左反転で朝鮮系。ところが吹来は右反転で、明治以降に右反転の洋式ブラウが導入され、北海道や東北地方の一部で使われました。

柳沢家の蔵では、この洋式ブラウを発見、何代か前のご当主の進取の気風と経済的豊かさを物語る資料です。

田植は女、こだわりは少ない

田植をするのは女が男か、各地でまちまちです。これは稲作の系譜やその他の人々の民族系譜をさぐる手掛かりとして注目しています。工藤正広氏によれば田植は女が中心だが手のすいたときは男も手伝うとのこと。花輪図書館民俗資料室の解説パネルでも女でした。

調査先に送ったニュースレター